## 0.1 Hall-Ore の定理

 $\Gamma(X) = \{ j \in V | \exists i \in X : (i, j) \in E \} (\Gamma : 2^U \to 2^V)$ 

$$\max |M| = \min_{X \subset U} (|\Gamma(X)| - |X|) + |U|$$

Hall-Ore の定理を証明する. U のなかで X 以外の残りを  $A, \Gamma(X) = B$  と表記する.

$$|A| + |X| = |U|$$
  
 $|B| = |\Gamma(X)|$   
 $|A| + |B| = |\Gamma(X)| - |X| + |U|$ 

ここで左辺はカバーであり Koning の定理より  $\max |M| = \min(|A| + |B|)$  なので示された. また系 |U| = |V| のとき以下も成り立つ.

完全マッチングが存在する 
$$\Leftrightarrow \exists X \subseteq U$$
に対して $|\Gamma(X)| \ge |X|$ 

以下証明を記す. |M| = |U| ならば完全マッチングであり

$$0 \ge \max |M| - |U| = \min(|\Gamma(X)| - |X|)$$

したがって  $|\Gamma(X)| - |X| \ge 0$  ( $\forall X \in U$ ) ならば  $|\Gamma(X)| - |X| = 0$ 

# 1 非負行列

定義 1 A が非負行列  $\Leftrightarrow$  要素ごとに  $a_{ij} \geq 0$ であり、このとき $A \geq 0$  とかく

定義 2 A が正行列  $\Leftrightarrow a_{ij} > 0$ 

たとえばマルコフ連鎖を考えると推移行列は非負である.

$$p_{ij} \ge 0(\forall i, j)$$
$$\sum_{i=1}^{n} p_{ij} = 1(\forall i)$$

定義 3 A が確率行列  $\Leftrightarrow$   $A \geq 0$ かる  $\sum_{j=1}^n a_{ij} = 1 ({}^\forall i)$ 

定義 4 A が二重確率行列  $\Leftrightarrow A$ もA<sup>T</sup>も確率行列

## 1.1 Birkhoff-von Neumann の定理

定理 1 任意の二重確率行列は置換行列の凸結合 (重 $\lambda \geq 0$ , 重 $\lambda = 1$ ) で表せる.

置換行列とは各行各列にちょうど一個だけ 1 を持ち残りはすべて 0 の行列であり、完全マッチングに対応している.

証明は A の非ゼロ要素数についての帰納法で行う. グラフの枝の数を v とする.

v=n のとき A 自身が置換行列である.

一般に  $|\Gamma(X)| \ge |X|(^{\forall}x \subseteq U)$  のとき完全マッチングが存在する.

$$|\Gamma(X)| = \sum_{j \in \Gamma(X)} 1 = \sum_{j \in \Gamma(X)} (\sum_{i=1}^n a_{ij})$$
(列和が1なので)
 $\geq \sum_{j \in \Gamma(X)} (\sum_{i \in X} a_{ij})$ 
 $= \sum_{i \in X} \sum_{j \in \Gamma(X)} a_{ij}$ 
 $= \sum_{i \in X} \sum_{j=1}^n a_{ij}$ 
 $= \sum_{i \in X} 1$ (行和が1なので)
 $= |X|$ 

M: 完全マッチングを選ぶと置換行列  $P_M$  が対応する.  $\mu: \min_{i,j \in M} a_{ij} (a_{ij} \neq 0)$  とする.

 $\tilde{A}=A-\mu P_M$ とおくと $\tilde{A}$ の行和列和  $=1-\mu$  である.  $(\tilde{A}$ の非ゼロ数)  $\leq (A$ の非ゼロ数) -1 であり以下のように  $\tilde{A}$  が凸結合で表せると仮定する. すると A も凸結合で表せる.

#### 1.2 既約な行列の定理

定理 2  $A \ge 0$  で A が既約なら  $(I+A)^{n-1} > 0$ (正方行列)

$$(I+A)^{n-1}x > 0 \ \forall x \ge 0 (x \ne 0)$$
を示せばよい.

 $x_{k+1} = (I+A)x_k(x_0=x)$  とすると  $x_k \to x_{k+1}$ でゼロ要素数が減ることを示す.

$$x_k = \begin{bmatrix} \alpha \\ 0 \end{bmatrix} (\alpha > 0) \quad A = \begin{bmatrix} A_{11} & A_{12} \\ A_{21} & A_{22} \end{bmatrix}$$
$$x_{k+1} = \begin{bmatrix} \beta \\ \gamma \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} A_{11}\alpha \\ A_{21}\alpha \end{bmatrix}$$

 $A_{11} \ge 0, \alpha > 0 \ \ \ \beta > 0$ 

A は既約なので  $A_{21} \neq 0, \alpha > 0$ より  $A_{21} \alpha \neq 0$  なので  $(x_{k+1})$  のゼロの数) $<(x_k)$  のゼロの数)

## 1.3 Perron-Frobenius の定理

 $A \ge 0$  で既約としスペクトル半径は  $\rho(A) = \max |\lambda|(\lambda : 固有値)$  である.

定理 3 • ρ(A) は固有値

- ho(A) は単純固有値 (重複度=1)
- $Ax = \lambda x \mathcal{O} x > 0$